

新しい時代における国際文化教育の研究

Studies of Pedagogy of International Cultures and Societies in the New Era

総括研究員：東 好男

分担研究員：時岡ゆかり 七尾 誠 福田美智代 宮田 実

「新しい時代の国際文化教育」についての共同研究プロジェクトが発足して、ちょうど1年を経過した。各研究員は、これまでの外国語科目を改名し新たにスタートさせた「言語文化科目」、及び新設された「欧州・米国の社会と文化」科目の教育において、「国際文化教育」の具体的実践とその手法の模索の渦中にある。欧州と米国という分野に限定した「国際文化教育」の可能性を開拓する出発点として、主に他大学の状況把握、その分野における科目の関連教材、テキスト等の資料の収集を中心に、以下の各研究員による初年度研究を実施した。ここに列記し平成9年度研究報告のレジュメとする。

東 好 男

国際文化教育が教育の場で実践を要請されるのは「社会と文化科目」と「言語文化科目」の中との二つである。本研究員は初年度において、前者の本学の最新カリキュラムで導入となった「ヨーロッパの社会と文化科目」に関連する他大学での直接、間接の事例、教材及びテキスト等の具体的な状況把握に努めた。またこの「社会と文化科目」を受講する学生を対象として、これらの科目についての率直な印象、要望、批判、等をできるだけ吸い上げることに努めた。2年度以降は、上記の2種類の調査を継続すると共に、ヨーロッパ、特にイギリスに焦点を当て、この科目の教育内容と対応又は関連する外国の大学での教育事例、手法についての資料を収集する予定である。

時岡ゆかり

現代においては単なる翻訳ではなく積極的コミュニケーションを図るための英語表現能力の向上が必要となってきた。JACET関西支部ライティング研究会では約千名の大学生を対象にアンケート調査を行ったが、その中で、ライティングで困難を感じ、今後学習の必要性を認識している分野として一番多くの学生が指摘したのが語彙であった。習得必要とされている語彙と、実際に学生が習得している語彙の間にはどのような差があるのか、又学習指導によって語彙はどの程度向上するのか、等を理論のみが先行するのではなく、語彙テストを含めて実践を積み上げていく中で模索している。目的はライティング指導の基本的な、総合的な指針に到達することである。

七尾 誠

本学の新しいカリキュラムがスタートしてから3年目になる。旧「一般教育」にかわる

「総合教育科目」の中の「国際社会・文化科目」は、この新カリキュラムになってから初めて開講された全く新しい科目の一つである。筆者はこのうちの「ヨーロッパの社会と文化」を担当しているが、全く新しい科目であるが故の混乱・当惑に日々つきまといられているのが実状である。具体的な講義内容としては「19世紀のフランスにおける民衆の生活」を素材としているが、資料提示の方法、歴史の大きな流れの中での様々な事象の位置づけなど、まだまだ研究するべきものが山積している。今後は、当時の民衆の姿がよりくっきりと浮かび上がるような参考資料の収集に望みたい。

福田美智代

1995年から実施されている新しいカリキュラムを導入するに当たり、外国語教育の在り方が再度問い直され、改善のための様々な提案がなされてきた。知的理解や外国の文化・事情の吸収という教養面を土台として、コミュニケーション能力の養成を目指す必要性が今まで以上に求められている現状を考慮すると共に、外国における、外国語としての英語教育の例を参考にしながら（具体例を、ドイツ、韓国、中国、イギリス、アメリカからとり）、学生が積極的に自己表現できるような、より良き英語教育の在り方を考えていきたい。

宮田 実

カリキュラム改正で新しく設置された「国際文化科目」の一つである「アメリカの社会と文化」を1995年度より担当している。受講生のアメリカに対する関心は高く、特に現代のアメリカの社会と文化、現代アメリカ人のライフスタイル全般に興味を持っている。本学での「国際文化科目」を今後より良きものにするためにこのプロジェクト研究が始まった。

1年目（1997年度）は、国際文化教育とは何かを探り、又、他大学で行われているアメリカ関連のカリキュラムの実態を把握するための資料収集を行った。又、本学での「アメリカの社会と文化」の講義ノートやハンドアウト作成のための資料収集を継続的に行った。